

新潟・下ノ西遺跡 しものにし

- 1 所在地 新潟県三島郡和島村大字小島谷
- 2 調査期間 二〇〇〇年度調査 二〇〇〇年(平12) 四月～一

二月

- 3 発掘機関 和島村教育委員会
- 4 調査担当者 田中 靖
- 5 遺跡の種類 官衙跡
- 6 遺跡の年代 七世紀後半～一〇世紀前半
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(三 条)

下ノ西遺跡は、島崎川低地の微高地に位置しており、北側には島崎川・小島谷川・梅田川の合流点を控え、北陸道が付近を通過するなど、水・陸上交通の要衝の地に立地する古代遺跡である。周辺には同時期の遺跡が高密度に分布し、本遺跡北西八〇〇mには、古志郡衙に関連するといわれる国指定史跡

八幡林官衙遺跡が所在する。

下ノ西遺跡では、一九九六年度以降、和島村教育委員会によって数次の調査が実施されており、飛鳥時代から平安時代を中心とする多数の遺構・遺物を確認している。遺構では、平面積二五六㎡を最大とする多数の掘立柱建物や南北道路、一〇〇〇個体を越す土師器碗を廃棄した土坑などが注目される。遺物には多量の施釉陶器・帯金具・木簡などがみられ、遺構の様相とともに一般集落とは異なったあり方を示している。特に、公出拳・国司借貸について記した帳簿様木簡や、「越後国高志郡」と国名から書きはじめる貢進物付札は、本遺跡が古志郡衙関連遺跡であることを如実に物語っている。

二〇〇〇年度の調査では木簡二二点が出土したが、ここでは釈読できない削屑五点を除く一七点を紹介する。出土遺構は、一点が井戸SE九五六である以外は、全て過去に木簡が出土した溝SD二〇一と直交するSD二〇二である。両溝は建物SB二三を囲う排水・区画施設とみられ、同時に機能していた可能性が高い。本溝からは、馬形・斎串などの祭祀具が比較的多く出土した点が注目される。

8 木簡の釈文・内容

溝SD二〇二

- (1) ・ □越後国□□〔遣召カ〕



(158)×(20)×5 081

(2)	・荒非 「子」	(116) × 18 × 6	019
(3)	・「>。志多々美」 〔部子カ〕 ・「>。丈」	127 × 25 × 3	032
(4)	・〔道カ〕〔道カ〕 君阿刀連	(161) × (20) × 4	081
(5)	・「右人」	(120) × (14) × 2	081
(6)	□□	(110) × (14) × 2	081
(7)	・「□□□□□□□□」	222 × (20) × 5	081
(8)	・人足 「」	(78) × 14 × 3	081
(9)	・大夫 □□□	(74) × (24) × 2	081

(10)	・出拳 □□	45 × 17 × 3	081
(11)	□□	38 × 13 × 2	011
(12)	□□	(131) × (45) × 6	081
(13)	・「大」 □□	(63) × (29) × 4	081
(14)	・「出力」 □□連得麻呂	(122) × (28) × 2	081
(15)	・「神亀カ」 □□□□	091	
(16)	・「越道カ」 □□	091	
(17)	井戸SE九五六 「>□□□足」〔人カ〕 □□（墨線七本）□□	214 × (13) × 3	032

完形である(3)以外は、折損・二次加工などにより原形が損なわれ

ている。以下ではある程度釈読できたものについて概要を記す。

(1)は、二片に割れ、左辺以外は原形をとどめない。文中に「越後国」の記載があり注目されるが、断片のため詳細は不明である。

(3)は、完形の付札で、頭部右側の切り込みに近い部分に穿孔がみられる。表面に物品名である「志多々美」（小さい巻き貝の一種）の文字、裏面に貢進者とみられる「丈部」の人名が記されている。

(4)は、上下端及び右辺を欠損する。原形をとどめる左辺は、下に向けてやや細く成形されており、一見封緘木簡の柄部に似る。両面に文字が認められ、一面は人名を列記したものである。ウジ名の「道君」「阿刀連」は、いずれも越後国では初見である。

(9)は、二片に割れており、上端は表面から刃物を入れて切断している。「大夫」については既出土資料に「掾大夫」とあり（本誌第二〇号）、国司に対する尊称と考えられる。

(10)は、上下左右ともに、文字を切つて二次加工がなされている。断片のため詳細は明らかでないが、出挙に関わるものとみられる。

(14)は、五片に割れる。下端・左辺は原状。表面は人名の列記とみられる。裏面は、「神亀二（年）」と書かれている可能性が高く、S D二〇一・二〇二出土資料の所屬時期の一端を示すものであろう。

なお、木簡の釈読については、新潟大学の小林昌二氏・相沢央氏からご教示をいただいた。

（田中 靖）

